

『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』の 翻訳書としての不完全さ

——訳出されなかった語の視点から——

計良 吉則, 酒井 シヅ

順天堂大学医学部医史学研究室

受付：平成23年5月6日／受理：平成24年1月6日

要旨：『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』をレメリンの原書と比較し、「訳出されなかった語」について調査した。「訳出されなかった語」には、訳書の図譜に符号が付けられずに省略されたものと、符号はあるが解説文において省略されたものがある。これらを分析すると、訳書の符号を不適切に付けたことに起因する省略、訳者自身の判断による恣意的な省略、従来の東洋医学の概念では理解できないなどの理由で、訳語を記入できずに省略、の可能性が示された。本稿は「訳出されなかった語」の視点から、『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』の翻訳書としての不完全さを論証する。

キーワード：『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』, 本木良意, 『Pinax microcosmographicus』, 省略語, 東洋医学

1 はじめに

本稿では、『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』を原書と比較し、「訳出されなかった語」の視点から、同書の翻訳書としての不完全さを論証する。

わが国の医学の西洋化は江戸時代中期(1774年)出版の『解体新書』により、本格的な歩みが始まった¹⁾。しかしそれより約90年前の1680年代に長崎オランダ語通詞の本木良意がドイツの医師レメリンの解剖書『Pinax microcosmographicus』を翻訳している。『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』(以下、『阿蘭陀』と略す)と題されたものがそれである。わが国においては人体解剖がまだ公には行われていない時期である。

『洋学史事典』²⁾によれば『阿蘭陀』は「わが国最初の翻訳解剖書」とあるが、「わが国最初」の前に「不完全ながら」が付されている。

『阿蘭陀』の翻訳書としての不完全さは、この訳書の内容に対する分析によるものであるが、実際これまで『阿蘭陀』には多くの先行研究がある。

酒井は『阿蘭陀』に関する複数の論文³⁾⁴⁾⁵⁾の中で、二つの特徴を指摘している。一つは、訳書は東洋医学と西洋医学の基本とする原理が異なることを十分認識していないために、東洋医学的解釈をしていることである。もう一つは、訳書は図譜および解説文の順序が原書と異なっていることである。これらの理由から「現代の翻訳の定義からはずれたもの」と評している。

また小川⁶⁾は翻訳の動機に関して、「訳者(本木)自身がこれによって日本医学の改革を目指す如き大なる気魄を欠き、この点解体新書との間に著しい差がある」と記している。

そこで『阿蘭陀』の図譜および解説文を原書と比較したとき、明らかに気付くことがある。それは『阿蘭陀』の訳語の数が、原書に記載された語の数より、明らかに減少していることである。

前述したように『阿蘭陀』における図譜および解説文に関しては詳しい先行研究が多くあり、その訳語の特徴はほぼ言い尽くされている。しかしいずれの研究も、『阿蘭陀』にある訳語に対する

分析であり、原書にあって訳書に現れなかった語、すなわち「訳出されなかった語」についてはほとんど言及していない。

『阿蘭陀』の翻訳書としての不完全さを論ずるうえで、レメリン原書『Pinax microcosmographicus』を翻訳する過程での「訳出されなかった語」について考察することは重要である。翻訳とは本来、原書に記載された内容に対して忠実かつ逐語的に訳出されるべきものである。したがって翻訳書の不完全さを論ずるうえで「訳出されなかった語」に対する分析は欠かせない。

調べてみると、『阿蘭陀』における「訳出されなかった語」に的をしぼった研究は意外にもない。日本医史学雑誌(巻1~巻57)に該当論文はなく、国立情報学研究所(GeNii・CiNii)および国立国会図書館(NDL-OPAC)を検索する限り該当する論文は見当たらない。

本稿において筆者は『阿蘭陀』の「訳出されなかった語」に注目し、それらの語について分析した。その分析結果の視点から、『阿蘭陀』の翻訳書としての不完全さについて改めて論考した。

その結果、従来とは異なる視点から『阿蘭陀』の翻訳書としての不完全さが、いくつかの点で新たに明らかとなった。

2 一次資料について

比較対照に用いた資料について明記する。レメリンの解剖書は1619年にラテン語版『Catoptrum Microcosmicum』が正規に出版され、その後フランス語版やドイツ語版が出版されている。本稿で用いた資料は1667年に出版されたオランダ語版⁷⁾『Pinax microcosmographicus』である。当時わが国は鎖国の時代で、原書を舶載したのは当然オランダ人であり、本木が翻訳に用いた原書はこのオランダ語版であった可能性が高い⁸⁾。したがってその版を用いての比較が妥当と考えた。

一方、本木の訳書『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』は原本が現存しない⁹⁾。しかし写本が4点残されており、福岡の原三信家に伝わったもの、名古屋の蓬左文庫所蔵のもの、秩父の片山家所蔵のもの¹⁰⁾、三河地方で故安井広氏が見つけたもので、

その中で原家所蔵のものをもっとも原本に近い姿を残しているとされる¹¹⁾。これは本木の訳書『阿蘭陀』を6代目原三信元広が写したものであり、それには貞享四年(1687)九月吉日と日付が記してある¹²⁾。本稿ではこの原家のものを訳書として用いた。

3 「訳出されなかった語」の種類

調査の結果、『阿蘭陀』において訳出されなかった語は、大きく次の2群があることが判明した。

- 1 訳書の図譜に原書に対応する符号が付けられず、解説文にも訳語がない語
- 2 訳書の図譜に原書と対応する符号が付けられているが、符号に対応する解説文がない語

では次に具体例を示す。

3-1 訳書の図譜に原書に対応する符号が付けられずに、解説文に訳語がない語

これに相当する代表的な語には以下のものがある。すべて「原符号 原語」(筆者訳)と表記する。

第1図Fcies 1. Figure Aにおける「a 't Opperhooft」(前頭部)、「c Het achterhooft」(後頭部)、「g De koon of kaken」(顎の頬)、「c Het slincker weeck」(左の軟らかい部分)、「g De spitswyse spieren」(錐体筋)、「d desselfs verdeylde pees」(腱の分岐部)、「s De pier spieren」(ミミズ様筋)、第2図Fcies 1. Figure Oにおける「f Het boven vlack van't mid-delreef, met het borstvlies bedeckt」(胸膜と接する横隔膜の表面)、「g Een afghescheurt deel van't middelvlies tusschen welckete speuren is seen merckelyke hollicheyt」(縦隔の部分をえぐって内部を観察したところ)、第2図Fcies 1. Figure Nにおける「a De afgesneden ader azygos」(奇静脈の横切るところ)、第3図Fcies 2. Figure Aにおける「i 't ghehemelte des monts」(口蓋)。

第1図Fcies 1「Van de Beenen en Zenuen des gantshen lichaems」における「e Het schouder blad」(肩甲骨)、「m de vingeren」(手の指)、「r 't derm been」(腸骨)、「u 't heup been」(寛骨)、「g Het ship been」(舟状骨)、「m De eerste zenue des arms」(腕

第1神経), 「n De tweede」(第2), 「o De derde」(第3), 「p De vierde」(第4), 「q De vyfste」(第5), 「r De sesste」(第6).

第1図Fcies 7. Figure Bにおける「i, i den doolhof, daer in drie verwelssels zyn」(3つのアーチ形からなる迷路), 「k het sleckhuysken in 't steenachtich been」(耳小骨とつながる蝸牛), 「l, l de gaetjes van 't doorsneden steenachtich been」(耳小骨と交わる前庭窓),

3-2 訳書の図譜に原書に対応する符号が付けられているが、符号に対応する解説文がない語

これに相当する代表的な語には以下のものがある。すべて「原符号 原語」(筆者訳)と表記する。

第1図Fcies 1. Figure Aにおける「a, b, c 't Behaerde deel des hoofts」(頭部の毛髪部分), 「a, c, i 't Hooft」(頭), 「f, g, i Het aengesicht」(顔), 「m, a, i Den romp des lichaems」(胴体), 「m, n, y, x, a De borst」(胸部), 「a, A, e, e, i De buyck」(腹部), 「o Den duym」(親指), 「p Den wyser」(人差し指), 「q Den middelsten」(中指), 「r Hert of rinckvinger」(薬指), 「s Den pink」(小指), 第2図Fcies 1. Figure Bにおける「a, b, B, c, d Den Pensack」(腹腔).

「女男同 イロ 面」に対応する第3図Fcies 1. Figure Aにおける「a De ader van 't voorhoofd」(前頭部の静脈), 「b Die van de slaep des hoofts」(側頭部の静脈), 「同 ハニホヘトチ 左右の手」に対応する第3図Fcies 1. Figure Aにおける「A De Hooft-ader」(頭-静脈), 「c, d De lever-ader」(肝臓-静脈), 「* de mediana, ghemeyne, swarte, oft hart-ader」(正中の交通, 黒い, すなわち心臓-静脈), 「e De Milt-ader」(脾臓-静脈), 「f De Hooft-Ader in de hant」(手の頭-静脈). 「同 ヲワカヨタレ 左右の足」に対応する第3図Fcies 1. Figure Aにおける「: De buytenste scheen-ader」(最外の脛-静脈), 「g de binnenste scheen-ader en hare kromten」(最内側へ曲がる脛-静脈), 「h De Heup-ader」(臀部-静脈), 「i De Moer-ader」(母-静脈), 「k De ader van de groote Teen des voets」(足の拇趾の静脈), 「l De ader van den kleynsten teen」(足の小趾の静脈).

「前五」の「セ(空欄)」に対応する第1図Fcies 1. Figure Dにおける「e de Moeder-ader die omtrent den binnensten enkel opent」(内果付近から始まる母-静脈), 「耳之図」の「ルル(空欄)」に対応する第1図Fcies 7. Figure Bにおける「i, i den doolhof, daer in drie verwelssels zyn」(3つのアーチ形からなる迷路), 「腹」の「カカカ(空欄)」に対応する第1図Fcies 3. Figure Cにおける「m, m, m de dichte van de lysmoeder」(子宮の厚い部分), 「舌ノ根之図」の「ロロロロ(空欄)」に対応する第1図Fcies 15. における「c, c, c de hooghte, waer aen, door banden, het tonge been, ende het kraeck-beenigh schilt gehecht is」(舌骨の大角で舌骨の靭帯を通り甲状軟骨につながる), 「舌ノ根之図」の「チ(空欄)」に対応する第1図Fcies 15. における「h Een vlietsachtich bindsel, de ommloop des long pyp vervullende, en die aen een bindende」(気管内にしきつめられた結合組織を結ぶ膜性壁), 「頭之図四」の「ロロ(空欄)」に対応する第2図Fcies 2. Figure Cにおける「c, c Het welfsel」(脳弓), 「経絡但虚大経」の「ハハハ(空欄)」に対応する第2図Fcies 11. における「f, f, f De openinge der mondekens of de t'samenkomst der wortelen van beyde aders」(門脈と大静脈が吻合するところ), 「肋ヲ順ル本経根之図」の「ロロロ(空欄)」に対応する第3図Fcies 11. における「b, g, g de Gadeloose-ader」(奇静脈), 「肋ヲ順ル本経根之図」の「ホ(空欄)」に対応する第3図Fcies 11. における「c de verdeylingh van de Gadeloose-ader by de 7.en8.ril」(第7, 8肋骨の位置で分かれる奇静脈の枝). 「心臓左割開ク図」の「チ(空欄)」に対応する第3図Fcies 16. における「f De uytterlycke substantie des Harts sluytende de holligheydt」(心室を囲む外側の心臓実質).

4 「訳出されなかった語」の分析

前節で示した語について、さらに細かく分析する。

4-1 訳書の図譜に原書と対応する符号が付けられず、解説文にも訳語がない語

4-1-1 符号の見落としによる省略

原書第1図 Fcies 1. Figure Aにおいて、「a 't Opperhoofst」(前頭部)はアルファベット「a」が符号の語であり、原書の解説文では先頭に近い部分に記載されている。具体的には1番目が「総称」としての「a, c, i 't Hoofst」(頭)、2番目も「総称」としての「a, b, c 't Behaerde deel des hoofts」(頭部の毛髪部分)。「a 't Opperhoofst」(前頭部)はこれらに次いで3番目に記載されている語である。

原書第1図 Fcies 1. Figure Aは訳書の解説文の「前一」に対応するが、「前一」は「イ 頭頂」から始まっている。原書で「イ 頭頂」に対応する語は「b Den kruyn」である。

アルファベット「a」から始まる語「a 't Opperhoofst」(前頭部)は、本来なら訳書の解説文でも先頭にその訳語が記載されるべきものである。にもかかわらず訳出されなかった理由を以下に示す。

先行研究にあるように¹³⁾、本木は翻訳する際に原書の解剖図にある符号の順序を無視して、写本に自分の都合でイロハ……の符号を書き込んだ。図の上から下へ、右から左への順に、原書のアルファベットの順序と関係なく符号を付けた。その結果、原書で図の最上に位置する「b Den kruyn」(頭頂)が、訳書の解説文で最初に「イ 頭頂」と記載されることになったのである。一方「a 't Opperhoofst」(前頭部)は原書の図譜を見ると、「a」の符号が毛髪の模様と重なって判別が困難である。すなわち原書の図譜で「a」の符号が見落とされ、訳出されなかった可能性が高い。それを裏付けるように、「c Het achterhoofst」(後頭部)も「c」の符号が毛髪の模様と重なって判別が困難になっているが、これも「a」と同様に訳出されていない。

こうした例は他にも複数指摘できる。原書第1図 Fcies 1. Figure Aにおける「c Het slincker weeck」(左の軟らかい部分)は図の左上腹部に「c」の符号が付けられているが、解剖図の膨らみを出す陰影と重なって判別が困難である。その結果、見落

とされ訳出されていない。原書第1図 Fcies 1. Figure Aにおける「g De spitswyse spieren」(錐体筋)は腹壁の最下位にある三角形の小さな筋肉であるが、原書の図では鼠径部に付けられた陰影のために「g」の符号の判別が困難となっている。その結果見落とされ訳出されていない。原書第1図 Fcies 1. Figure Aにおける「s De pier-spieren」(ミミズ様筋)は中手にある小さな筋(現代の用語では虫様筋)であるが、原書の図では「s」の符号の判別が困難で見落とされ訳出されていない。同様に第2図 Fcies 1. Figure Oにおける「f Het boven vlack van't mid-delreef, met het borstvlies bedeckt」(胸膜と接する横隔膜の表面)、「g Een afghescheurt deel van't middelvlies tusschen welckete speuren is seen merckelyke hollicheyt」(縦隔の部分をえぐって内部を観察したところ)、第2図 Fcies 1. Figure Nにおける「a De afgesneden ader azygos」(奇静脈の横切るところ)、第3図 Fcies 2. Figure Aにおける「i 't ghemelte des monts」(口蓋)なども原書の図における符号の判別が困難で見落とされ、その結果訳出されていない。

4-1-2 「骨」と「神経」部分の省略

原書第1図 Fcies 1「Van de Beenen en Zenuen des gantshen lichaems」は骨と神経の解剖であるが、ここでの省略が訳書の中では目立つ。訳書の解説文では「前六」がこの部分に対応している。この「前六」で「訳出されなかった語」が多い理由を以下に示す。

まず第1図における原書と訳書の解説文の対応について整理する必要がある。Fcies 1のFigure Aが体表の解剖で訳書の「前一」に対応している。Figure Bは筋系の解剖で「前二」に対応し、Figure C1・C2とFigure Dは脈管系の解剖でそれぞれ「前三」「前四」「前五」に対応している。これらのうち筋系に対応する「前二」と脈管系に対応する「前三、四、五」は、訳出されなかった語が「前六」に比べて明らかに少ない。原語と訳語がほぼ一対一になっている。

次に「前六」で「訳出されなかった語」について分析する。まず「骨」に関する語が多く省略さ

れている。すなわち「e Het schouder blad」(肩甲骨)、「m de vingeren」(手の指)、「r 't derm been」(腸骨)、「u 't heup been」(寛骨)、「g Het ship been」(舟状骨)、「m De eerste zenue des arms」である。このように「骨」の語が多く訳出されなかった理由として、当時における東洋医学の影響を指摘できる。

先行研究によると、東洋医学では骨学がほとんど発達していなかった¹⁴⁾。『黄帝内経』の「明堂図」¹⁵⁾は関節などの人体の結節点(経穴)を通る「流れ」を重視し、そこに描かれた骨自体は簡略化されている。東洋医学の多大な影響下にあった当時のわが国において、人体を構成する「骨」に対する関心は決して高くない。訳者である本木も例外ではない。本木にとって「骨」に対する知識の不足から、骨の構造が十分に把握できず、その結果「骨」に省略が数多く生じた可能性がある。

「前六」において「訳出されなかった語」で多い他の一つは「神経」である。「神経」も「骨」と同様、東洋医学では発達しなかった領域である。先行研究によると、神経解剖学に関する用語は東洋医学に由来するものがほとんどなく、オランダ語「zenuw」に対して「神経」が用いられたのは『解体新書』が初めてである¹⁶⁾。訳書の解説文「前六」では、連続して6つの「神経」が訳出されていない。すなわち「m De eerste zenue des arms」(腕第1神経)、「n De tweede」(第2)、「o De derde」(第3)、「p De vierde」(第4)、「q De vyfste」(第5)、「r De seste」(第6)である。「前二」～「前五」の解説文において、これほど連続して訳語が省略されている部分はなく、単なる見落としによるものではない。本木は原書の「zenue (n)」(神経)に対して「筋(スジ)」または「脳筋」と訳している。その意味では「経絡」とは区別している。しかし「zenue (n)」が東洋医学にはない、全く新しい概念であることを十分には理解していなかった¹⁷⁾。人体解剖が行なわれる以前の時期に、解剖図に描かれた共に線状に見える「血管」と「神経」とを、具体的に全く異なるものであると認識していた可能性は低い。たとえ「ader」(静脈)に「経」,「zenue (n)」(神経)に「筋」という別々の訳語を充てたとしても、である。後述するように、訳書では繰

り返し登場する部分は、本木自身の判断で省略され訳出されないことがある。つまり「前六」で連続する6つの「神経」が訳出されなかった理由はこうである。東洋医学にない全く新しい概念である「神経」と、東洋医学の「経絡説」に関連付けた「脈管」との間で混乱が生じた。その結果6つの「神経」はすでに「経」の部分で翻訳済みと勘違いされ、省略された可能性がある。

4-1-3 「頭」部分の省略

第1図 Fcies 7. Figure B に対応する「耳之図」において訳出されなかった語に注目する。訳書で省略された語は原書の「i, i den doolhof, daer in drie verwelssels zyn」(3つのアーチ形からなる迷路)、「k het sleckhuysken in 't steenachtich been」(耳小骨とつながる蝸牛)、「l, l de gaetjes van 't doorsneden steenachtich been」(耳小骨と交わる前庭窓)の3つである。いずれも頭部(内耳)の微細な構造物である。

東洋医学は五臓六腑を重視するが、頭はそれに含まれていない。先行研究によると、東洋医学の解剖図は胸腹内の器官は示すが、頭蓋骨を割ってその内部を示すというものはない¹⁸⁾。道教の立場は脳(泥丸)を人体の重要な中枢の一つと考えるが、五臓を中心に据える東洋医学においては脳を奇恒の腑と位置づけ、それほど重要な役割を与えなかった¹⁹⁾。

したがって、それまでの東洋医学の知識では「頭」の構造や働きに対する知識が十分でなかったといえる。まして内耳という微細な解剖図において、符合が正確に付けられないのも無理はない。その結果、この部分での省略が数多く生じた可能性がある。

他の図における「頭」の解剖図についても分析する必要がある。原書第2図「Facies 2」は男性左足下にある頭蓋骨および脳について記載したもので、表層から深層へ4つに分類され、「Figuyr A」～「Figuyr D」の順になっている。訳書はそれに対して「頭之図一」～「頭之図七」と7つに独自の分類をして記載している。語数は原書52に対して訳書43と減少している。第2図「Facies 3」

は「Het wonderlyck Net」(怪網)と題される。これはガレノス医学の影響とみられ、その後存在を否定されたものであるが、訳書では「頭中脳髓袋ノ図」と記載されている。語数は原書4に対して訳書3に減少している。第2図「Facies 4」は脳動静脈についての説明である。「心臓ヨリ發頭ノ経絡ノ図」と訳され、語数は原書25に対して訳書22に減少している。第3図「Facies 2」は女体右足下にある頭蓋骨および脳について記載したものである。表層から深層へ4つに分類され、「Figuyr A」～「Figuyr D」の順になっている。訳書はそれに対して「頭筋筋之図」、「頭之図二」～「頭之図四」とやはり四つに分けて記載している。語数は原書42に対して訳書39に減少している。第3図「Facies 6」は小脳の図である。訳書では「頭後脳之図」と記載され、語数は原書5に対して訳書3に減少している。第3図「Facies 7」は脳とそれに出入りする脈管の図である。訳書では「頭脳右方之図」と記載され、語数は原書37に対して訳書26に減少している。これら「頭」に関連する部分の原書と訳書の語数を比較すると、訳書における語の減少率は約18パーセントに上る。

他の脈管、筋、内臓の部分では、訳語の減少率がほとんど10パーセント未満であるのに対して、「頭」の部分において訳語の減少が目立つのである。

以上のように、「頭」の部分は「訳出されなかった語」の数が他の部分に比して明らかに多い。これは本木のそれまでの東洋医学を中心とする解剖知識では、「頭」の構造を十分に把握し、的確に符号を付け訳出するのが困難であったことを意味する。

4-2 訳書の図譜に原書に対応する符号が付けられているが、符号に対応する解説文がない語

4-2-1 既知の語を省略

原書の第1図 Fcies 1. Figure A に「a, b, c 't Behaerde deel des hoofts」(頭部の毛髪部分)と記載されている。これは「a 't Opperhoofd」(前頭部)、「b Den kruyn」(頭頂)、「c Het achterhoofd」(後頭部)を含むいわゆる「総称」である。しかし訳書には

「総称」に対する訳語は見当たらない。これ以外にも「総称」に類する語で訳出されなかった語は複数ある。例えば「f, g, i Het aengesicht」(顔)、「m, a, i Den romp des lichaems」(胴体)、「m, n, y, x, a De borst」(胸部)、「a, A, e, e, i De buyck」(腹部)、第2図 Fcies 1. Figure B における「a, b, B, c, d Den Pensack」(腹腔)がある。

原書において「総称」にあたる語は常に異なる数種類の符号を併記して1つの解説文を記載している。具体的には「f, g, i Het aengesicht」(顔)というものである。この語を正確に訳出すると「ヘトリ 面」のように記載されるべきであるが、そのような語は訳書にはない。実際に訳書において、1つの解説文に異なる符号が付けられているものは数えるほどしかない。例えば「頭之図七」に「チチリヌ 目 鼻 口」とあるが、これに対応する語は原書になく、明らかにこれは「総称」ではない。さらに原書第3図に対応する「女体図」の「イロ 面」、「ハニホヘトチ 左右ノ手」などは「総称」と言えなくはないが、原書にはそれに対応する語はない。これらは訳者自身の判断による省略である。

つまり原書にある「総称」のように、複数の異なる符号が一つの解説文に付けられることは訳書においてはほとんどない。原書において「総称」に相当する語の多くは、訳出されていない。

「総称」が訳出されずほとんど省略された理由を以下に示す。「総称」としての語は「f, g, i Het aengesicht」(面)、「m, n, y, x, a De borst」(胸)、「a, A, e, e, i De buyck」(腹)など、わが国では古代から用いてきた語が多い²⁰⁾²¹⁾²²⁾。

また「総称」以外にも、以前から用いられてきた身体の語については訳出されないものがある。原書第1図 Fcies 1. Figure A の「o Den duym」(親指)、「p Den wyser」(人差し指)、「q Den middelsten」(中指)、「r Hert of rinckvinger」(薬指)、「s Den pink」(小指)はすべて訳書では省略され、「ムムムム 五ノ指」と記載されている。そして本来これらの訳語が入る箇所には、原書第1図 Fcies 21 に対応する手の細かな筋の訳語が替わりに記載されている。

以上から、わが国ですでに身体に用いられてきた語や、東洋医学の知識で周知の語の中には訳出されなかったものがある。本木はこれらの語は既知のものと捉え、あえて訳出するまでもないと判断し、意図的に省略した可能性がある。

4-2-2 類似語の簡略化

符号は付けられているが訳出されなかった語で、先の例とは異なる省略の仕方がある。「g De koon of kaken」(顎の頬部)は原書の図譜では、「f De wange」(頬)と近接した位置に符号が付けられている。訳書の図譜では原書に対応する2か所に「ホ」「ホ」と同一の符号が付けられ、解説書には「ホホ 頬」と1つだけの訳語が記載されている。つまり原書では近接した2つの位置にそれぞれ異なる語があるにもかかわらず、訳書では近接していることから意図的に「同じもの」と解釈し、片方の訳語のみ記載しているのである。

こうした簡略化が行なわれた理由について以下を挙げる。先行研究から『阿蘭陀』は長崎奉行に差し上げられたものであり、この翻訳は以前にレメリン解剖書を入手した老中稲葉美濃守正則の意志による可能性が指摘されている²³⁾。本木にとってこの翻訳はオランダ語通詞としての役目であり、その主たる目的は西洋の解剖書に興味をいだいた幕府の高官を、訳書により満足させることにあった²⁴⁾。したがって、原書の解剖図において近接した部位のわずかに相違する複数の語に対して、代表する一つを訳語とすることは十分に許容範囲であったと想像できる。本木の執筆態度である、「訳するに国字を以てして、俗語を厭はず、要は差はざるなり」²⁵⁾からも、訳語を記載するうえでわずかな相違には拘泥しなかったことがわかる。

4-2-3 繰り返し出現する語の省略

原書第2図 Fcies 1. Figure Aにおける「a」から「j」までは男体の皮静脈の用語が記載されている。また第3図 Fcies 1. Figure Aにおける「a」から「l」までは女体の皮静脈の用語が記載されている。これらは全く共通しており原書では省略することな

く、解説文にはすべて繰り返し記載している。それに対して訳書では、原書第2図に対応する解説文は一対一で訳出されているが、原書第3図に対応する解説文には省略がある。すなわち「女男同 イロ 面」とだけ記載し、「a De ader van 't voorhoofd」(前頭部の静脈)、「b Die van de slaep des hoofts」(側頭部の静脈)に対するそれぞれの訳語はない。同様に「同 ハニホヘトチ 左右の手」に対応する「A De Hoofd-ader」(頭-静脈)、「c, d De lever-ader」(肝臓-静脈)、「* de mediana, ghemeine, swarte, oft hart-ader」(正中を通る、黒い、すなわち心臓-静脈)、「e De Milt-ader」(脾臓-静脈)、「f De Hoofd-ader in de hant」(手の頭-静脈)は省略されている。また「同 ヲワカヨタレ 左右の足」に対応する、「: De buytenste scheen-ader」(最外の脛-静脈)、「g de binnenste scheen-ader en hare kromten」(最内側へ曲がる脛-静脈)、「h De Heup-ader」(臀部-静脈)、「i De Moer-ader」(母-静脈)、「k De ader van de groote Teen des voets」(足の拇趾の静脈)、「l De ader van den kleynsten teen」(足の小趾の静脈)は省略されている。

このように同一の訳語を繰り返し記載することを避けた理由として、訳者の時間的制約が挙げられる。先行研究によると、オランダ語通詞の仕事は多岐にわたった。オランダ船が入港した際には立会い、貿易上の書類や風説書などの翻訳をした²⁶⁾。またオランダ人以外の者が潜入していないかの確認作業も行なった。本木が『阿蘭陀』の翻訳に携わったのは、1674(延宝2)年以降1682(天和2)年までとされている²⁷⁾。当時本木は「大通詞」の立場にあり、「江戸番通詞」の役目で長崎と江戸を往復し、極めて多忙であったと推測される。このような状況下において、同一訳語の繰り返しを避け一方を省略することは、少しでも手間を省くという点で必要なことであった。

4-2-4 訳語が記入されない空欄部分

訳書の図譜に符号は付けられているが、解説文が空欄になっている部分が10か所ある。訳語を記入するべくスペースを設けてあるが、何も記入されていない。

空欄が生じた原因は、『阿蘭陀』の翻訳過程にある。先行研究より、本木は訳書の図譜に付けたイロハの符号に従って、その箇所の説明をオランダ人医師に尋ねた²⁸⁾。当時来日していたオランダ人医師はW・テン・ライネ(1647~1700)で、1674(延宝2)年から1676(延宝4)年まで滞在した²⁹⁾。本木が翻訳を開始した頃と一致しており、訳語を尋ねたオランダ人医師はライネの可能性が高い。日本側が優れた医師を派遣してほしいとオランダ商館長に求め、ライネはそれに応じて来日したのである³⁰⁾。

『阿蘭陀』翻訳の過程をふまえると、訳書の解説文に空欄が生じた理由として二つのことが挙げられる。一つはオランダ人医師の説明を聞いても本木が理解できずに、訳語を記入できなかったこと。もう一つはオランダ人医師自身が訳語の説明を躊躇したこと、である。

では実際に、空欄部分10か所につき、空欄になった原因を推測する。

「前五」に「セ(空欄)」がある。これに対応する原書の語は、第1図Fcies 1. Figure Dの「e de Moeder-ader die omtrent den binnensten enkel opent」(内果付近から始まる母-静脈)である。原書は下肢の皮静脈の解剖であり、内果付近に枝を出した小静脈が上行しながら大伏在静脈となる。太い血管である大伏在静脈を指して、原書では「Moeder-ader」(母-静脈)と記述するが、説明を受けても本木にとって「母」と「静脈」とが結びつかず、理解できなかった可能性がある。

「耳之図」に「ルル(空欄)」がある。これに対応する原書の語は、第1図Fcies 7. Figure Bの「i, i den doolhof, daer in drie verwelssels zyn」(3つのアーチ形からなる迷路)である。頭部の内耳の細かい部分の解剖であり、「doolhof」(迷路)や「verwelssels」(アーチ形)の意味するところが、理解できなかった可能性がある。

「腹」に「カカカ(空欄)」がある。これに対応する原書の語は第1図Fcies 3. Figure Cの「m, m, m de dichte van de lysmoeder」(子宮の厚い部分)である。原書は女性の骨盤内臓器の解剖であり、「m」は子宮の筋層に付けられている。原書は筋

の肥厚した部分を「dichte」(厚い)と記載するが、説明を受けて本木は「筋」と「厚い」との関係が理解できなかった可能性がある。

「舌ノ根之図」に「ロロロ(空欄)」がある。これに対応する原書の語は、第1図Fcies 15. の「c, c, c de hoogte, waer aen, door banden, het tonge been, ende het kraeck-beenigh schilt gehecht is」(舌骨の大角で舌骨の靭帯を通り甲状軟骨につながる)である。原書は喉頭の細かな局所の解剖で、舌骨と甲状軟骨とが甲状舌骨靭帯で接合することを示している。本木はこの「靭帯」が関節での骨と骨を連結する構造物である、ということを理解できなかった可能性がある。実は骨と連結するもので、他にも訳出されなかった語がある。それは「pees」(腱)であり、原書第1図Fcies 1. Figure Bの「腱」に関連した3つの語がいずれも訳出されていない。本木は筋と骨が連結する部分である「腱」も理解できなかった可能性がある。つまりいずれも骨と連結するという特徴をもつ「靭帯」と「腱」は本木にとって、それらがいかなるものかを理解できなかった。

「舌ノ根之図」に「チ(空欄)」がある。これに対応する原書の語は、第1図Fcies 15. の「h Een vliessachtich bindsel, de ommloop des long pyp vervullende, en die aen een bindende」(気管内にしきつめられた結合組織を結ぶ膜性壁)である。原書では気管の後方の、平滑筋と粘膜でできた膜性壁を示している。本木にとって「骨」や単なる「肉」とは異なる「膜性壁」は、理解に苦しむところであったことは想像に難くない。その結果、訳語を充てることができなかった可能性がある。

「頭之図 四」に「ロロ(空欄)」がある。原書でこれに対応する語は、第2図Fcies 2. Figure Cの「c, c Het welfsel」(脳弓)である。原書は脳の細かな解剖で、脳弓は脳梁の下側にあつて、弓なりの線維体である。「弓なり」に見えるのは、脳を正中断面で見たときであり、原書のような水平断面で「弓なり」であると理解するのは難しい。本木は「Het welfsel」の説明を聞いても納得がいかず、訳語を充てられなかった可能性がある。

「経絡但虚大経」に「ハハハ(空欄)」がある。

原書でこれに対応する語は、第2図 Fcies 11. の「f, f, f De openinge der mondekens of de t'samenkomst der wortelen van beyde aders (門脈と大静脈が吻合するところ)である。レメリンの原書自体に現代解剖学から見ると、誤った所があることがすでに指摘されている³¹⁾。原書の図は門脈と下大静脈が、直接に結合しているように描かれている。しかし実際の門脈と下大静脈の流域が接するのは、腹壁の静脈か直腸の静脈を介してである。

オランダ人医師がライネであるなら、この原書の誤りに気づき、この部分の説明を躊躇したのではあるまいか。その根拠として以下のことがある。先行研究によると、レメリンの原書はベサリウスの解剖書をもとにつくられており、ハーヴェイの血液循環論を反映していない³²⁾。しかし訳書の中には血液循環を説明した部分が複数あり、オランダ人医師が説明したとされている。つまり水準の高いオランダ人医師が門脈と下大静脈との正しい連関を知っており、原書の誤りの部分に対する説明をためらった可能性がある。その結果この部分は訳出されなかった、とすると矛盾はない。

「肋ヲ順ル本経根之図」に「ロロロ (空欄)」がある。これに対応する原書の語は、第3図 Fcies 11. の「b, g, g de Gadeloose-ader」(奇静脈)である。原書では奇静脈と半奇静脈の局所の解剖図が描かれている。「奇」の語源はラテン語の「azygos」で「対称性でない」という意味である。しかし原書のオランダ語版は「azygos」に対して「Gadeloose」(配偶者のない)と記載しており、オランダ人医師がこのとおり説明したとすれば、「配偶者のない静脈」となる。本木にとって「Gadeloose」の意味するものが、「対称性でない」だと理解できず、訳語を充てられなかった可能性がある。

「肋ヲ順ル本経根之図」に「ホ (空欄)」がある。これに対応する原書の語は、第3図 Fcies 11. の「c de verdeylingh van de Gadeloose-ader by de 7.en8.rib」(第7, 8肋骨の位置で分かれる奇静脈の枝)である。原書では半奇静脈が奇静脈に流入する位置を示している。ところが訳書ではこれに対応する符号「ホ」が不適切な部分に付けられている。すなわち原書のように半奇静脈の枝の部分に付けられ

るべき符号が、訳書では奇静脈の本幹の部分に付けられている。そのため、オランダ人医師が原書に記載されたとおりに説明しても、本木は納得がいかなかった可能性がある。

「心臓左割開ク図」に「チ (空欄)」がある。これに対応する原書の語は第3図 Fcies 16. の「f De uytlycke substantie des Harts sluytende de holligheydt」(心室を囲む外側の心臓実質)である。原書では心臓の内腔に対して「substantie」(実質)という語を用い、心筋の部分に符号が付けられている。本木は心臓の「substantie」が、「内腔」に対して用いられていることを理解できず、訳語を充てられなかった可能性がある。

5 むすび

本木良意の訳書『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』は、わが国最初の翻訳解剖書であり、その存在価値は大きい。鎖国の時代にあつて、西洋医学が流入し始めた17世紀の末に、オランダ語解剖書の翻訳を試みた先駆的役割は十分評価に値する。長崎オランダ語「大通詞」という多忙な要職にありながら、翻訳のための時間を捻出し、長い年月をかけて完成させたことは称賛されるべきものである。『阿蘭陀』はわが国において、西洋医学受容の歴史の中で輝ける功業といえる。

だからこそ『洋学史事典』において『阿蘭陀』が「不完全ながら」と付される意味に対して、もっと議論されるべきである。

これまでの『阿蘭陀』の先行研究が、訳出された語の内容の評価に重点をおいている³³⁾ことから、本稿において筆者は「訳出されなかった語」の視点から分析を行なった。

『阿蘭陀』の図譜および解説文を原書と比較すると、訳語の数が原書の語の数より、明らかに減少している。調査したところ、訳書において「訳出されなかった語」は次の二つのパターンがある。すなわち、訳書の図譜に原書に対応する符号が付けられず、解説文に訳語がない群と、訳書の図譜に原書に対応する符号が付けられているが、符号に対応する解説文がない群である。

前群を分析するとさらに次の三つの特徴が判明

した。第一に符号の見落としによる省略である。本木は翻訳する際、原書の解剖図にある符号の順序を無視して、写本に自分の都合でイロハ……の符号を書き込んだ。その結果、原書の図で判別が困難な符号は見落とされ、訳出されなかった。第二に「骨」と「神経」部分の省略が目立つことである。原書の「骨」と「神経」の部分に対応する「前六」の訳語の数が、他の部分よりも明かに減少していた。その原因として、従来の東洋医学で「骨」学がほとんど発達していなかったこと、また「神経」が東洋医学にない全く新しい概念であることを十分に理解していなかったこと、が挙げられる。第三に「頭」部分の省略が目立つことである。東洋医学は五臓六腑を重視するが、頭はそれに含まれていない。東洋医学における解剖図は胸腹内の器官は示すが、頭蓋骨を割ってその内部を示すことはなかった。その結果、東洋医学の知識では脳構造の把握が十分にできず、符合が正確に付けられないために、「頭」部分での省略が数多く生じた。

後群を分析するとさらに次の四つの特徴が判明した。第一に既知の語を省略したことである。面、胸、腹、親指、人差し指、中指、薬指、小指など、わが国ですでに身体に用いられてきた語や、東洋医学の知識で周知している語の中には訳出されていないものがある。本木はこれらの語に対し、あえて訳出するまでもないと判断し、意図的に省略した。第二に類似語の簡略化である。本木の執筆態度を表す言葉に「訳するに国字を以てして、俗語を厭はず、要は差はざるなり」がある。この訳書の主たる目的は、西洋の解剖書に興味をいだいた幕府の高官を満足させることにあった。したがって解剖図の近接した部位のわずかに相違する複数の語に対して、代表する一つの訳語を充てることは十分に許容範囲であった。第三に繰り返し出現する語の省略である。その理由として、訳者の時間的制約があげられる。当時本木は「大通詞」の立場にあり、「江戸番通詞」として極めて多忙であったに違いない。同一訳語の繰り返しを避けることは、手間を省くために必要であった。第四に解説文に10か所の空欄があり、訳語が記入さ

れていないことである。空欄が生じた原因は、『阿蘭陀』の翻訳過程にある。本木は翻訳にあたり、阿蘭陀人医師の説明を口授筆記した。したがって訳語の説明をオランダ人医師に聞いても、本木が理解できなかった場合、オランダ人医師自身が訳語の説明を躊躇した場合、解説文に空欄が生じたと推定される。

まとめると「訳出されなかった語」は、訳書の符号を不適切に付けたことに起因する省略、訳者自身の判断による恣意的な省略、従来の東洋医学の概念では理解できないなどの理由による省略、よることが示された。

以上、本稿により、『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』の翻訳書としての不完全さが「訳出されなかった語」の視点から初めて明らかになった。

文献

- 1) 酒井シヅ. 解体新書 全現代語訳. 東京: 講談社; 1998. p.3-6
- 2) 日蘭学会編. 洋学史事典. 東京: 雄松堂出版; 1984. p.133
- 3) 小川鼎三・酒井シヅ. 『解体新書』出版以前の西洋医学の受容. 日本学士院紀要 1978; 35 (3): 138-142
- 4) 酒井シヅ. 江戸時代の西洋医学の受容. 吉田忠編. 東アジアの科学. 東京: 頤草書房; 1982. p.9-13
- 5) 酒井シヅ. 日本最初の西洋解剖書の翻訳. 原三信編. 日本で初めて翻訳した解剖書. 福岡: 思文閣出版; 1995. p.90-93
- 6) 小川鼎三. 明治前日本解剖学史. 東京: 日本学術振興会; 1995. p.138
- 7) Russell, Kenneth Fitzpatrick. A bibliography of Johann Remmelin the anatomist. Melbourne (Austr.): Irwin & McLare n Pty. Ltd.; 1991 p.71-72
- 8) 前掲文献 5) p.83
- 9) 前掲文献 5) p.83
- 10) 成瀬勝俊. 本木良意訳『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』をめぐる考察. 日本医史学雑誌 2010; 56 (2): 253
- 11) 前掲文献 4) p.10

- 12) 前掲文献5) p. 83
- 13) 前掲文献4) p. 11
- 14) 前掲文献4) p. 40
- 15) 石田秀実, 中国医学思想史, 東京: 東京大学出版会; 1992. p. 156
- 16) 高橋昭, 「世奴」から「神経」へー江戸時代日本神経学のあけぼのー, 神経内科 1997; 46: 313-320
- 17) 松村紀明, “解体新書”以前の「神経」概念の受容について, 日本医史学雑誌 1998; 44 (3): 85-97
- 18) 中山茂, 近世日本の科学思想, 東京: 講談社; 1993. p. 73
- 19) 奥野繁生, 「脳為元神之府」をめぐってー李時珍から張錫純へー, 日本医史学雑誌 2011; 57 (1): 39-50
- 20) 計良吉則, 『古事記』の中の身体に関わる表現, 日本医史学雑誌 2002; 48 (3): 416-417
- 21) 計良吉則, 『風土記』の中の身体に関わる表現, 日本医史学雑誌 2003; 49 (1): 46-47
- 22) 計良吉則, 『日本書紀』の中の身体に関わる表現, 日本医史学雑誌 2004; 50 (1): 156-157
- 23) 前掲文献5) p. 91
- 24) 前掲文献4) p. 46
- 25) 杉本つとむ, 長崎通詞 ことばと文化の翻訳者, 東京: 開拓社; 1981. p. 70
- 26) 前掲文献25) p. 34
- 27) 前掲文献5) p. 86
- 28) 前掲文献4) p. 11
- 29) 杉本つとむ, 江戸蘭方医からのメッセージ, 東京: ぺりかん社; 1992. p. 123-124
- 30) 前掲文献5) p. 86
- 31) 前掲文献5) p. 93
- 32) 前掲文献4) p. 12
- 33) 計良吉則, 『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』からみた十七世紀末におけるわが国の身体観, 日本医史学雑誌 2000; 46 (3): 446-447

Imperfections in “Oranda Keiraku Kinmyaku Zoufu Zukai” as a translation: From the Perspective of “Untranslated Terms”

Yoshinori KEIRA, Shizu SAKAI

Juntendo University School of Medicine, Department of Medical History

Comparing “Oranda Keiraku Kinmyaku Zoufu Zukai” with the original edition by R Emmelin, I conducted an examination of “untranslated terms.” Some “untranslated terms” were omitted without any mark noted in the illustrated reference book of the translation, while others were omitted in the commentary, although their marks appear in the reference book. The analysis of these terms has clarified that the omissions were most likely caused by inappropriate annotation of marks in the translation, or due to the translator’s arbitrary judgment of omissions, or because the terms were beyond comprehension by conventional concepts of Eastern medicine and thus entries for their translations were impossible. This article demonstrates the imperfections in the translation of “Oranda Keiraku Kinmyaku Zoufu Zukai” from the viewpoint of “untranslated terms.”

Key words: “Oranda Keiraku Kinmyaku Zoufu Zukai”, Ryoji Motoki, “Pinax Microcosmographicus”, Omitted terms, Eastern medicine